

項目	評価の観点	評価		項目に関する分析・意見・提言 など ○職員 ◇学校関係者(地域等)	今後の改善に向けて
		自己(職員)	学校関係者		
主体的・対話的で深い学び	互いに認め合う支持的風土を育てる学級・学年集団づくりに努めた。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ○iPadの活用を努め、教育効果の向上に役立てようとする教員が多かった。 ○ICTを活用した授業力と合わせて、情報モラルについての授業力についても取り組む必要がある。 ○「めあて」「ふり返り」や学び合いを習慣的に取り入れられるようになった。 ○校内研究全体会等を通して、主体的・対話的で深い学びへの理解を深めたり、「めあて」「ふり返り」の大切さを確認した。今後の実践に生かしたい。 ○新しい学力観の講習を今年度は度々していたので、それをふまえて授業にどう反映していくか次年度の課題である。 ○研修の中で主体的・対話的で深い学びを追究する授業をどのように仕組んでいったらよいかということについて話を聞いたり話をしたりすることが今後の授業を考える上で役に立った。 ○「ふり返り」を行う際は、学校で共通して示されている3つの観点だけでなく、つけさせたい力にに応じて書き添った視点について示したい。 ○研修会を通して、授業改善をするきっかけになった。 ○授業研究する機会が少なかった。具体的な実践につながる授業研究が今後は必要である。 ○授業改善をもっと参画したり、そのふり返りなどをしていかなければ授業力も向上していない。 ○校内研究は、授業の質を上げて、その取り組みについてみんなが話し合う形がよい。 ○基本的な授業力を向上させていくにあたって、新しい学力観についての共通理解を大切にしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ここ数年「めあて」と「ふり返り」の活動に全校で取り組んできているが、今年度の校内研究全体会を通して、その有用性を再確認できたため、次年度は改めてどの教員もこの活動を軸において授業づくりに取り組むたい。 ・今年度の校内研究全体会を通して、今後育成を目指す資質・能力について理解を深めることができつつある。次年度はこの力を育成することをねらいとした授業づくりを主な活動に据えて全校で校内研究に取り組む。 ・授業改善を進めいくにあたっては、学習指導要領で示されている児童に育成したい3つの力「学びに向かう力、人間性など」「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力など」を視点とする。具体的な授業改善をすることと並行して、学習指導要領で示されている内容について各教員が主体的に学んでいくことを行う。 ・これらが必要とされる力について、児童、保護者とも共通理解を図っていく。
	「めあて」「ふり返り」や学び合いを取り入れた授業づくり。「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を育む授業計画など、主体的・対話的で深い学びを追究する授業研究や研修会に取り組んだ。				
確かな学力と個性を伸ばす教育の推進	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる活動を工夫した。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○道徳の授業だけでなく、学校生活全般を通して指導に努めた。 ○子どもたちの言動の中に「殺す」「死ぬ」の言葉を経々しく使っている姿が見られ、マスコミや子どもたちの見るアニメなどの影響もあると思うが心配している。 ○道徳を保護者に公開したのが道徳教育が向上しているかの検証も含めて考えていく必要がある。 ○授業を見てもらったり、見せていただく中で授業づくりの引き出しを増やしたり、考えを深めたりすることができた。今後も教員間同士で気軽に参観できる場を大切にしたい。 ○どの保護者にも道徳を見せるという制限がなかったから、コロナの影響もあり、結果的に公開できない学年もあった。 ○今回の授業参観で道徳の授業を保護者に見てもらったことができた。 ○これからの学力観に沿った道徳授業について理解を深めたい(以前までの授業との違い等)。 ○軽々しく様々な言葉を使う子どもに対しては、少し注意するところはあるが、何も言わない内に極める子どもの方が危険性があるように思うので、注意して見ていく必要がある。 ○未だ「死ぬ」「殺す」等の強い攻撃的言動を使う子どもたちはいるが、その数は年々減少していると感じる。引き続き質の高い道徳教育に取り組んでいただきたい。 ○授業公開等、積極的に取り組まれている。 ○引き続き、保護者向けに展開していきたい。 ○学校生活の全体を通して道徳の基盤を重畳させていくことは、その通りなことと共感する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、道徳授業や、学校全体で進める道徳教育の具体的なあり方について職員向けの研修会を持つ。 ・道徳授業の研究をすすめ、道徳の授業の向上に努める。 ・道徳授業のみでなく、日頃の学級づくりや生徒指導はもちろん、学校生活のすべてで道徳性を高めることを意識して指導する。
	道徳科の教材、評価に関する研究を行い、資料の整備・交流に努めた。				
	道徳科の時間を公開するなど、保護者や地域との連携も視野に入れて道徳教育に取り組んだ。				
体力づくり	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善に努めた。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○コロナ禍で密を避ける方法をいろいろ考えながらの取り組みで苦労した。 ○密になって遊べない中で、1人でもできるフラフープ、なわとびなど体を動かせることを取り入れられた。 ○体育科として学校全体を系統的にとらえた授業づくりの工夫やコツを学びたい。 ○体育が子ども体力充実のために重要だが、人手、時間に余裕がない(着がえ、準備など)。 ○行事に向けて職員間の共通理解が十分でなかった面があった。取り組みへの意識も個人差がある。 ○授業改善をもっとすすべと反省している。 ○コロナ禍における体力低下の可能性をふまえた指導の工夫に努めた。 ○コロナ禍でもまだまだできることはあると思う。たくさんの人から知恵を出し合って、今後の体力向上策を考えていかなければいけない。 ○マラソン大会などコロナ禍の状況においても子どもたちの体力維持の為に何かできないかと工夫した提案がなされた。 ○なかよし学級では、1校時のトレーニングの時間を活用して様々な運動に意欲的に取り組めるよう工夫した。 ○外の運動に関しては制限を緩和していいように思う。 ○体育参観では、やはりコロナ禍での運動不足から、しっかりと走り切れない子どもが目立ったが、学校の方で楽しみながら無理なく運動できる体育授業をされている。 ○コロナ禍の下、部活動が中止や縮小もあって、そうした中で工夫を凝らしている。 ○コロナ禍のもとで体力作りにも色々工夫されているようで、その取り組みの推進に期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育的行事や授業について、体育部を中心に学校全体で考えていく必要がある。 ・感染症対策を講じた上で、業間などを使っての体力向上策を工夫する。 ・学習指導要領を基に、子どもが主体的に学習に取り組めるような授業を工夫する。
	ランラン月間、体育の宿題、チャレンジランキングなど、運動に親しむ環境づくりや体力づくりを推進する運動実践に努めた。				
	体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲の育成に努めた。				
指導体制(一貫的・統一的)	指導体制・指導方法の工夫改善に努め、学力向上を目指した。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもたちの実施から弱みを具体的に挙げてそこにアプローチする取り組みを学校全体で積み上げていくシステムがほしい(校内研究との関連)。 ○学びづくり部会を中心に研修を通して宿題の出し方や指導の方法の改善に向けて話し合い考えることができた。 ○ICT活用について、研修も受けながら活用できるように努めた。 ○今年度G I G A スクール構想でタブレットを用いた授業を取り組むことが増えた。 ○タイムカード導入を機に、定時退勤への意識を高めた職員もいる。 ○働き方改革と言いつつも早く帰ることだけで改善されたとははれない。家でしている仕事の時間についても課題である。 ○運動時刻の設定は助かると思うことが多くあった。ただ、仕事がたまっている一方なので、週1回くらい休んで仕事ができれば(結局持ち帰ってやっているため)。 ○せめて学期末など忙しい時だけでももう少し学校で仕事ができることがありがたい。 ○どの教科(単元)でどのように活用したかをデータ化することで来年度にも生かせる。 ○各担当や一人ひとりが業務改善に向けて考え、自ら実践していく姿勢でありたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現行の「家庭学習の手引き」を新しい学力観に即した内容に更新し、家庭学習を通して育成する力について全職員で共通理解を図る。また、児童が系統的に学習への取り組み方を身につけることができるよう、発達段階ごとに「めあて」を設ける。 ・働き方改革の理解した上で、全職員でできる改善を進めていく。その際、一人ひとりが主体的に改善を図っていく姿勢を持つ。 ・これまで教員が背負ってきた業務が幅広く、多忙を極めているが、関係機関との連携を進め、関係機関が担うべき役割を明確にし、確立し始めているところがある。 ・タイムカードの導入により、各個人の働き方が客観的にわかるようになったので、セルフマネジメントし、月ごとの姿勢の改善に生かす。 ・会議等では、開始時刻と終了時刻を意識した業務の仕方を推進する。
	職員研修、会議等を通して、学校全体としての教育力、指導力の向上に努めた(ICTの活用含む)。				
	働き方改革や教育活動の質の改善に向け、計画的な準備・役割分担・ICT活用などの取組に努めた。				
家庭・地域との連携	保護者との個別相談や必要に応じて関係機関との連携を図り、子育てに対する積極的な支援に努めた。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○登校不安を訴える児童については、本人や保護者の思いを確認し、担任の促しと保護者の励ましの意図がずれないよう連絡調整に努めた。 ○連携はしている。人手や余裕不足な感じがする。もっと密で手厚い関わりができればと思うことが多い。 ○メール配信やHPを活用し、迅速な情報発信に努めた。 ○ホームページにある「学年のページ」について、学年による発信の差があるため、学校全体として推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域等外部との連携は、コロナ禍においても実施可能なものを昨年度よりは行うことができた。今と同じ状態は来年度以降も続くと考えられるため、その中で実施可能な内容や方法を作り出していく必要がある。 ・コロナに関わる保護者・家庭との連携は、ケアや学習保障も含めて各担当が丁寧に行っており、引き続き丁寧な連携に努める。 ・今後も学校メールは、運用基準に則って配信していく。 ・ホームページの運用については、特定の教員のみが担当するのではなく、各学年の担当者を明確にするなど、組織的な運用を図る。 ・本年度末より、児童の欠席、遅刻、連絡WEBフォームから受け付けられるようにシステムを構築した。今後も、必要に応じて、デジタル化を組織的に進めていく。
	保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会の実施や地域人材の活用に努めた。				
	家庭・地域と連携しながら、防災・防災教育の推進、感染症対策の推進を図るため、メール配信やホームページなどを活用して情報発信をし、安心・安全な学校づくりに努めた。				
発達小の連携	発達小中の連続性を意識し、子どもの校種間交流や教師の出前授業などの具体的な連携に努めた。	C	C	<ul style="list-style-type: none"> ○管理職や担当を中心に近隣校間と密に連絡を取っている。 ○コロナ禍で発達できずにいる発達小中連携は、できない中でも、今後や来年度以降、どう連携していくことができるか、また、再開できる状況になったときにどういった形で行っていくかを今のうちから準備し、早くから進めたいという意向を、子どもに伝えるのではなく、職員間で話し合うことができ、教員間でも互いに支援し合えるようになった。 ○本年度から参加校間の実施に合わせた内容の唐教研となり、積極的に参加する教員が増えた。 ○今後は、場所での組織や唐教研の組織や活動という意識や、子どもは地域と連携していく中で育つという視点を持つことが必要。 ○本年度、各校間の組織との整合性や機能性を持った唐教研の組織として組み直した。今後は、小学校の取組と唐教研の取組をうまく運動させ機能させていくことが課題となることを念頭に置いておく必要がある。 ○発達小の連携をスムーズで有効なものにしていくために、入学当初の状況や課題を園に伝えたり在園時の情報を提供していただいたりした。 ○1日入学等何も体験できず入学して行く児童に対して、児童・保護者への不安や課題を解決するための手立てが必要。 ○コロナ禍が明けたときに、単に過去と同じものに戻すことだけでは解決できないと思う。今の環境に合わせたものを作り出していくことも可能だと思う。(Webやリモートの活用など) ○どこの校種も同じだが、相手校の事情、状況があるので無理に交流する必要はないように思える。それが思いやりなのではないか。 ○唐教研の組織替え等、新連携強化に努められている。 ○コロナ禍のもとでは、校種との連携は難しいと思われるが、情報の発信や共有など、できることを工夫して推進されていくよう期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ここ数年、発達小中連携については、協議を経て整理することができてきている。整理にあたって、見直された意義について確認していくとともに、今後も必要に応じて継続して見直ししていく。 ・本年度より整理された唐崎教育研究部と、学校の取組と関連させる。地域で共通した取組を今後も継続させていく。 ・発達小連携では、各園でアプローチカリキュラムを作成が図られており、小学校のスタートカリキュラムも作成されているが、各園との連携が十分に行われていないため、連絡会を通じて確認していく。今後、さらに連携を進め、実効性のあるものにしていく必要がある。
	唐崎人権教育研究会(唐教研)など、発達小・小中の校種の枠を超えた合同研修会を実施した。また、発達小連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の授業公開に努めた。				
	発達小連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。				
組織体制の充実	日ごろから子どもとの関わりを意識的に高め、子どもが気軽に相談できる雰囲気づくりなど、諸課題の早期発見、日常的な予防指導に努めた。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもが担任やSC、子ども支援などと気軽に話せる雰囲気がある。 ○SCやSSW、教育相談センターの指導のもと支援の方法について考え、組織的な対応に心がける。 ○支援すべき子に手が回りきっておらず、まだまだ改善すべき。 ○教員間で意識の格差が出ないようにしていかなければならない。 ○生徒指導等に関する悩みや時期に月間目標をたてて、学校全体で取り組むしくみを作りたい。(あいさつ月間やそうじ月間など) ○問題行動等への組織体制(ルール)が確立されている。全教員で共通理解し、各種対応に役立っている。 ○学級や学年の課題について、生徒指導や教育相談などの連携は取れている。 ○様々な課題を学年で共有、解決に向けて話し合うことができ、教員間でも互いに支援し合えるようになった。家庭との連携にも努めた。 ○いじめ、問題行動の早期発見、解消に努めることは確かに大切だが、あわせて子どもとの関係修復スキルを高めていくという視点も必要である。 ○何かあれば学年主任、各担当と連携をとり、組織対応ができていた。 ○課題をかかえる児童について卒業まで確実に取り組んでいくようにする。 ○情報モラル教育性力を入れることが急務である。 ○いじめに関する報告文書がかなり多い。効率化や分担化を図れないか。 ○もっと学校全体に子どもと大人、子ども同士がいきつる雰囲気があれば、学校全体での子どもの安心感が育まれるのではないかと。 ○マスクを着用するようになり、子どもたちの挨拶がぐっとできなくなりました。まずは、大人が気持ちよい挨拶の手法を示し、挨拶ができる唐小を作っていく。 ○職員の見解から、まだ改善すべき課題があるように感じる。 ○子どもが相談できる雰囲気をつくって出ている先生と、苦手な先生がいるようである。学校が目指すしくみや体制づくりに良い方向に向かっていると思う。 ○保護者、児童共のアンケートにおいて、肯定的、高い評価となっている。更に今後の改善策に挙げておられる事項を伺いたい。 ○具体的な目標を設定して、子どもたちに働きかける取り組みを推進しているようので、評価できるものと思う。 ○情報の共有、共通理解を推進して取り組むの充実を期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年内で授業を交換して支援の必要な子を共有する。 ・生活支援員の有効な活用ができるよう、学年から出た要望を吸い上げ、支援計画を立てる。 ・教育相談月間について、生活アンケートをきっかけに担任が児童一人ひとりとじっくり面談できるよう、日課等の工夫を検討する。 ・担任や教師は自学年以外の情報を共有するため、校支援システムの連絡掲示板に掲載された内容を確認し、全職員が把握に努める。 ・学年間で対応のずれがないよう、部会などで実際の事業をとりあげて、どのように対応するか確認する。 ・特活との連携を深め、代表委員会や課題に挙げたことへの取り組みを具体的に考え、振り返り、学級ごとに改善する場を設ける。 ・学級経営の方法を共有する場を設ける。 ・引継ぎの書類に、担任以外に対応した教師・関係機関がどのように対応したのか、対応したメリット・デメリットなど具体的に記載していく。 ・「数呼のよいあいさつ」の見本の動画やポスターを作成し各学級で示す。教師の姿を子どもが見ているので、教師が実際に元気づけ大きな声で実践していく。
	問題行動や不登校などの課題に対して、学年・担当と共に組織的な指導・支援ができた。				
	あいさつ運動、子どもくらしのやくそく、いじめ対応など、家庭・地域・関係機関との連携による指導に努めた。				
特別支援教育の充実	支援を要する児童の個別の指導計画を作成・活用し、支援に努めた。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○支援する児童が多い中で、学年で話し合いながら支援内容、方法を決めていくことができた。 ○適切な時期に個別の指導計画についての面談が行えた。 ○支援計画を立てる基準がわかりにくい。 ○研修会等を行い、特別支援への理解を深めた。今後、求められる資質・能力との兼ね合いもふまえた指導方法も考えた。 ○障がい者理解教育を系統立てて、教育課程にしっかりと位置づけを取り組めるようにしたい。 ○支援の必要な子のことを学年でも共有できた。何年か経てば成果が出るものなので、今後も続けていきたい。 ○理解教育の系統性を高めたい。今後、本校に取組んだものとするのが課題である。各学年の支援の工夫を今後も継続し、本校の基本的な力となるようにしていきたい。 ○特別支援教育の一環で「ふつうで何？」という話題での授業を学年で実施したが、大変よい学習だと感じた。10月には4月に実施するほうがよい、他者理解に関する指導計画は1～6年でどんな力をつけたいか見直し、どんな実践をしていくか明確にしていきたい。 ○学校全体で研修会や理解教育が行われている。 ○本校の基本となるノウハウ・スキーム等の蓄積に努めてほしい ○支援を要する児童への関りは、直接指導にあたる者だけでなく、学校組織としての情報共有、サポートやバックアップの体制作りが不可欠であり、そのための取組を推進している。さらに充実するよう期待する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別指導計画を立てる基準としては、学校生活において必要だと考えた場合(行動面・学習面)保護者からの要望、他機関と連携した場合などが挙げられるが、明確にかけた部分がある。学習面、生活面において、ある程度明確な基準を部会で作成していく。また、個別指導計画の書き方については、研修を今年度同様計画し、書き方の冊子も配布していく。 ・従学指導の進め方及び流れについて全職員で共通理解できるようにする。 ・理解教育については、今年度の内容を完に改良して5月頃に実施することとし、各学年の学活の年間指導計画の中に位置づけることを検討する。 ・巡回相談については、何を相談したいのか明確になるように工夫する。 ・他機関との連携をスムーズにするため、特別支援コーディネーターの業務を精査していく。 ・夏の特別支援研修会を次年度も実施する。
	組織的・計画的な特別支援教育の体制づくりに努めた。				
	巡回相談などを活用し、関係機関と連携した相談体制の充実にも努めた。				